

標準語励行の実態と人々の意識 方言札に着目して

猿田 美穂子

1. はじめに

近代の沖縄では、沖縄独自の文化や思想を排除し、大和（沖縄から見た日本本土）の文化や思想を植えつけることを目的とした大和への同化政策が行われていた。言語も同化政策によって制限が加えられた。沖縄方言が禁止され、標準語を話すように教育されたのである。沖縄の小学校では方言を禁止し、標準語を普及させるために標準語励行と呼ばれる標準語教育が行われていた。標準語励行の際に使用されていたのが方言札である。方言札とは、主に小学校において方言を話した児童に与えられた罰則札のことである。方言札は言語を大和化するための道具と位置付けられていた。東北地方など、本土でも使用されていたとされているが、その普及は沖縄には及ばない。

方言札は当時の児童に対して多大な苦痛や圧力を与えたのではないかと考えられる。しかし、児童たちはこれを遊びの一種としてとらえていたという報告もある。本稿では、実際に方言札を使用した経験のある方や標準語励行を受けた経験のある方に聞き取り調査を行い、方言札の実態と使用者の意識を明らかにする。

2. 先行研究

2.1 方言札の由来

琉球王国時代から1908年（明治41年）に島嶼町村制が敷かれるまで、各地域に間切（沖縄独自の行政区分）村内法という掟が存在した。掟には農務や林業、風紀、納税などを取り締まるものがあった。この掟に違反した者にはハルバン札というものが与えられてた。井谷（2006）は、このハルバン札を応用して方言札が作られたのではないかと述べる。その根拠となるのが、以下の真境名安興によるハルバン札についての記述である。

科銭は一違反者あれば村にて協議の上、之れに該当する違反行為を定め、票札を渡す物とす。此の票札を所持する者は毎日一定の科銭科米を納付するものにて、次犯者を発見する迄は幾年月の間と雖も之れを支払ふの義務あり。

（『真境名安興全集1』琉球新報社、1993年（井谷2006:177）より）

この記述から、次の違反者が出るまでその札を持っていなければならないという方言札と同様の規則が確認できる。また、近藤（1998）の研究では、「うちの学校では方言札は使われていなかった。その代わりに村の青年団によって使われており、方言を使うと札を渡され罰金を払わされた」という言及が得られた。これは、学校内ではなく地域内の方言札ということになる。このような記述により、方言札とハルバン札

の共通点が見えてくることから、ハルバン札の応用が方言札だとされている。

2.2 沖縄本島の方言札

沖縄の方言札に関しては、近藤健一郎氏に一連の研究がある。近藤氏の調査は、沖縄の学校記念誌に掲載された回想記・座談会記録に基づくものである。ここでは、沖縄本島の調査報告である近藤（2002、2003、2004）の結果を要約して示す。

（1）方言札の特徴

[基本的特徴]

学校内で方言を話した児童は方言札を首からぶら下げられ、その児童は方言を話した児童を見つけて札を渡すというように使用されていた。方言札以外の罰則（掃除当番にされた、廊下に立たされたなど）が与えられることもあった。

[回避方法]

方言札を持った児童が他の児童を叩くことで「アガー（沖縄方言で「痛い」という意味）」と言わせ、方言札を渡す方法があった。「方言で言う」と言ってから方言で話す方法もあった。弱い児童に方言札を押し付けるといった弱いものいじめや、方言を話した、話していないということが原因で言い争いになるなど、友人関係を壊してしまうこともあった。

[使用範囲]

校門を出ると方言札は使用されないため、方言で話していたという事例と、家まで持ち帰り、方言を使う児童を探したという事例がある。

（2）地域ごとの調査結果

[沖縄南部]

調査した 26 校中 12 校で方言札の存在が確認された。使用されていた時期は 1900 年代後半～戦後である。那覇や首里などの中心部は 1920 年代後半～1930 年代後半であった。方言を話さず、標準語を話す児童には賞状が与えられたという事例があった。那覇市の小学校での方言札の存在は 1940 年頃の方言論争から問題にされるようになった。

[沖縄中部]

調査した 20 校中 15 校で方言札の存在が確認された。使用されていた時期は 1900 年代前半～戦後である。方言札の登場は 1907 年とされていたが、この調査で 1904 年頃という回想も得られた。

[沖縄北部]

調査した 28 校中 17 校で方言札の存在が確認された。使用されていた時期は 1900 年代前半～1940 年代前半である。教師は「せめて学校だけでも標準語を」と考え、方言札を作って取り締まった。方言を話した児童を毎日調べるというように、方言札を

使用せずに方言を禁止する指導もしていた。

3. 標準語教育の実態と人々の意識

3.1 調査の概要

近藤氏の研究は、学校記念誌という「書かれた記録」を資料としたものであるが、ここでは、現地での聞き取り調査の結果を報告する。話者は、那覇市（那覇・首里）・東風平町（近藤氏の研究では「沖縄南部」にあたる地域）の小学校に通っていた 10 名である（表 1 参照）。調査項目は、以下のものである。

(a) 標準語教育の実態

- ・標準語教育を受けたことがあるか
- ・方言札を使用した教育を受けたことがあるか
- ・方言札の形や大きさ
- ・方言禁止の理由をどのように教わっていたか
- ・方言使用者への罰則
- ・方言札の回避方法
- ・家でも標準語を使用していたか

(b) 人々の意識

- ・話者の標準語教育に対する意識
- ・話者の方言札に対する意識
- ・家族の標準語教育に対する意識

表 1 話者一覧

話者	性別	生年	年齢	出身小学校	現在の学校名
Aさん	女	1934(昭和9)	72	甲辰国民学校	
Bさん	男	1929(昭和4)	77	泊尋常小学校	泊小学校
Cさん	男	1934(昭和9)	72	泊国民学校	
Dさん	男	1930(昭和5)	76	首里第一国民学校	城南小学校
Eさん	女	1935(昭和10)	71		
Fさん	男	1950(昭和25)	56	城南小学校	
Gさん	女	1950(昭和25)	56	城西小学校	城西小学校
Hさん	男	1940(昭和15)	66	首里第三尋常高等小学校	城北小学校
Iさん	女	1943(昭和18)	63	城北小学校	
Jさん	女	1947(昭和22)	59	東風平小学校	東風平小学校

3.2 標準語励行と方言札が存在した時期

話者が小学生であった時期に、それぞれの出身小学校において、標準語励行が行われていたかどうか、方言札があったかどうかを、表 2 にまとめた。

表2 標準語励行と方言札の有無

話者	地域	現在の 学校名	出身 小学校	1930年代		1940年代		1950年代		1960 年代
				前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半
Aさん	那覇	泊	甲辰国民							
Bさん			泊尋常		×					
Cさん			泊国民							
Dさん	首里	城南	首里第一							
Eさん			城南							
Fさん		城西	城西						×	
Gさん		城北	首里第三							
Hさん			城北							
Iさん			城北							
Jさん	東風平町	東風平	東風平							

○：方言札があった

△：方言札はなかったが標準語励行は受けた

×：方言札はなかった

今回の調査で方言札の使用が確認された時期は1936年～1962年頃である。地域別にみると那覇は1940年代前半、首里は1930年代後半～1960年代前半、東風平は1950年代後半に使用が確認された。

泊小では1930年代後半には方言札の使用が確認されていないが、1940年代前半には使用が確認されている。1937年に国民精神総動員運動が開始され、日本を一つにまとめる政策が今まで以上に厳しくなった。国民精神総動員運動の一環として1939年には標準語励行運動が開始され、方言も厳しく制限されるようになった。そのため泊小ではこの時期に方言札が登場したと考えられる。

那覇や首里などの沖縄中心部では、方言札が登場した時期が地方よりも遅く、普及率も低い。また、城西小では今回調査した1950年代後半～1960年代前半での方言札の存在は確認できなかった。標準語励行や方言札がなくても方言と標準語を使い分けていたという(Gさん)。先行研究では1920年代後半に存在が確認されている。沖縄方言には階層差があり、首里の貴族が話していた首里方言がもっとも高い階層の言葉にあたる。当時の人々にとって標準語は「自分たちの生活を支配しおびやかす者の異質な言葉」であったため、各地で標準語励行が行われるようになっても励行を取り入れなかった。しかし、言語の最高階級が首里方言から標準語へと移行した。方言で話すことは恥ずかしい(Gさん)、標準語を話す家庭はステータスが高い(Fさん)と感じるようになった人々もいた。そして次第に標準語の必要性が感じられるようになったため、励行や方言札を取り入れざるを得なくなったのではないかと考える。首里と同じく中心部に位置する那覇も同様ではないだろうか。また、城西という地域は首里の中でも高い階級に置かれていた。言語の最高階級が首里方言から標準語に移行したことで標準語を話さなければ自分たちの地位が低くなってしまふことを危惧し、首里

方言と標準語の使い分けという選択をしたのではないだろうか。そして、1950年代後半～1960年代前半にはすでに使い分けができるようになっていたのではないかと考える。

3.3 標準語教育の実態

(1) 方言札の基本的特徴

札はA4を縦に半分にしたくらいの大きさの板に「方言札」と書かれているもの(Cさん、Hさん、Jさん)、A4の板に「私は方言を使いました」と書かれているもの(Cさん)、A4の厚紙に「私は方言を使いました」と書かれているもの(Fさん)などがあり、札にひもを付けて前にぶらさげていた。板を針金のようなもので後ろに付けるものもあった。(Eさん)方言札以外の罰則としては内申点の減点(Cさん、Dさん)、教師からのげんこつ(Cさん)、竹刀で手を叩かれる(Iさん)、教師の靴を川に洗いにいく(Iさん)などがあった。教育の方法や方針、罰則、教育の厳しさなどは学校や教師によって違うようだった。

(2) 方言札の回避方法

先行研究と同様の方法であった。方言札を持った児童が他の児童を叩くことで「アガー」と言わせ、方言札を渡す方法(Cさん、Dさん、Jさん)や、「方言で言うと」と言ってから方言で話す方法(Dさん)があった。

(3) 方言札の使用範囲

方言札を学校に置いて下校する学校(Fさん)と、家までぶら下げて下校し、次の日ぶら下げて登校する学校(Cさん)があった。学校では標準語だが、家などの学校外では方言を話していた児童が多い(Cさん、Eさん、Fさん)。父親が議員だった方は家でも標準語で話すよう教育されたこともあるという(Jさん)。児童の家族は標準語教育を受けていないため、標準語習得に対する意識が低かったのではないだろうか。また、児童と同様に学校では標準語を話し、学校外では方言を話す教師もいた(Fさん)。教師として県や学校側の意向を尊重し、学校では標準語を話しながらも、学校外では1人の沖縄人として方言を話してしまうことがあったのではないだろうか。

(4) 標準語励行の目的

児童たちは学校側から、本土の大学に入ったときや就職で本土に出たとき(Eさん、Hさん)、軍隊に入ったとき(Cさん、Dさん、Hさん)などに、本土の人々と話ができるようにするためであると教わっていた。戦時中、沖縄方言を話した人がアメリカ軍のスパイだと言われ、虐殺されたこともあるという(Aさん、Jさん)。天皇の人民が野蛮な言葉(沖縄方言)を話してはいけないと指導された(Dさん)、標準語を話すことで日本人の誇りを持つように指導された(Cさん、Dさん)という方もいた。

3.4 人々の意識

方言で話すことは恥ずかしいことだと感じていた人が多かったという言及が得られた(Cさん、Dさん、Gさん、Jさん)。方言を禁止され、劣等感を抱くようになった人もいた(Fさん、Iさん)。方言や文化など沖縄独特のものをすべて否定されたため、つらい思いをした人もいた。また、方言札を恐れたり憎んだりして苦痛に感じていた人(Iさん)と、鬼ごっこのようなゲーム感覚で回していた人(Cさん、Eさん、Fさん)がいた。罪の意識は薄かったという言及も得られた(Jさん)。教育を受けていた当時は方言札を苦痛、重荷に感じる人ばかりではなかったようだ。

方言大会などの公式な場で方言を話すことは現在でも抵抗があると述べる人もいた(Dさん)。標準語励行によって、方言は恥ずかしい言葉だと教えこまれたことが現在でも記憶に焼き付けられていると考えられる。

標準語がわかれば本土の人と話したり新聞を読んだりできるので、標準語教育は生活する上で必要だったと述べる人もいた(Aさん)。現在では標準語を習得することも大切だが、方言も残していきたい、大切にしていきたいという思いがある。この思いが現在の方言保護活動につながっていると考えられる。

5. 方言の社会的価値の変化

ここでは、沖縄における方言の社会的価値の変化を象徴する事象として、1940年に起きた方言論争と現在の方言保護活動について見ていく。

5.1 方言論争

方言論争とは、国民精神総動員体制の時期にあたる1940年に、沖縄方言をめぐって起こった論争のことである。論争を繰り広げたのは柳宗悦が主宰する日本民芸協会と沖縄県学務部であった。1939年に学務部の招きで沖縄を訪れた柳は、沖縄の伝統文化に魅了され、民芸協会の作家や研究者とともに沖縄文化を調査した。沖縄県側が主催した座談会において柳は、沖縄県内の宿泊施設や道路の設備、交通機関の充実などの意見を述べた。さらに沖縄の民芸品などの伝統文化の保存に力を入れるべきであるという提言がなされた。この提言の中で最も注目を浴びたのが方言に対する意見であった。柳は中央語である標準語の必要性を認めながらも、地方語である沖縄方言の重要性を強調した。また、方言を過度に否定するような標準語励行運動を批判し、方言の保護を訴えた。これに対して県側は、県民が軍隊に入ったときや本土に出たときに標準語が話せず、不利益を被っていることなどの事例を挙げ、県民にとって標準語励行運動は必要であるとして柳の意見に反論した。さらに沖縄の知識人たちの意見を交えて議論されたが、論争は決着しないまま1年余り続いた。沖縄の知識人たちは文化を守ることは賛成だが、生活するためには標準語が不可欠であるという意見が多かったようだ。例えば仲宗根政善は沖縄文化における方言の重要性を認識しつつも、方言は使用範囲が極めて狭いことを指摘し、日本文化の圧倒的な影響下のある現在の沖

縄は、標準語を徹底的に習得しなければならないと述べている（屋嘉比 2003）。このように、沖縄の人々は自分たちが不自由なく生活するためには標準語教育も必要であると理解を示していたにも関わらず、柳を含む本土の人々が標準語教育の激しさを卑劣に感じ、過剰に反応していたものと思われる。

現在、日本各地で方言保護活動が盛んになっており、沖縄でもさまざまな活動が行われている。戦時中と違い、現在の沖縄ではほとんどの人が標準語を習得し、方言が消滅危機にある。その危機的状況を回避するため、方言保護に目を向けるようになったのではないだろうか。また、沖縄を舞台にしたドラマや映画、音楽などが本土の人々を魅了し、沖縄の文化や方言が今まで以上に受け入れられるようになった。このような本土の人々の価値観に影響を受けた沖縄の人々は、今まで身近すぎて気づかなかった沖縄の良さを認識した。そして、沖縄の文化や方言を大切に守っていかなければならないと感じたため、現在の盛んな方言保護活動が行われるようになったのではないかと考える。

5.2 方言保護活動

今回の調査の際、実際に方言保護活動を見学したり、方言保護活動についてのお話を伺ったりすることができた。これらの活動を通して、沖縄の人々の方言に対する現在の意識をみるることができたように感じる。ここでは、2つの活動を紹介する。

(1) 城西小学校方言クラブ

クラブ活動を通して方言を学んでいた。地元の方3名を講師として招き、児童たちに方言を教えていた。琉球王国時代を舞台とした演劇を見せてもらった（写真1）。台詞がすべて琉球方言であった。標準語とは全く違う言葉であり、言葉だけでは内容理解が困難だった。また、顔のパーツの名称を標準語から方言に変えて発音させていた（写真2）。何度も繰り返し発音させ、単語と単語をつなぎ合わせて文を作らせていた。最後に琉球方言の子守唄を歌っていた。



写真1 方言クラブの児童による方言劇



写真2 地元ボランティア講師による方言教室

(2)しまくとぅば大会、島くとぅばお話大会

「しまくとぅば」とは沖縄の方言で、島の言葉、沖縄の言葉という意味である。方言を文化として残そうという目的で開催されている、沖縄方言で弁論を発表する大会である。沖縄の言葉といっても首里方言、泊方言などのように地域ごとに言葉が異なる。そのため、首里ことば大会、泊ことば大会のように地域ごとに分けるべきだという意見もあった。この大会に出場した方の中には、方言で話することに抵抗を感じたという人もいた(Dさん)。方言を話すことは恥ずかしいことだという教育を受けたため、今でも公式な場や大衆の前で方言を話すことに抵抗があるのかもしれない。

これらの活動から沖縄の人々には、方言に触れてもらう、関心を持ってもらうということにとどまらず、方言を実際に話せるようにする、身に付けさせるという意識が強く働いているようにみえた。方言を通して文化や伝統的な事柄を継承させようという意識も感じられた。



写真3 「しまくとぅばの日」ポスター

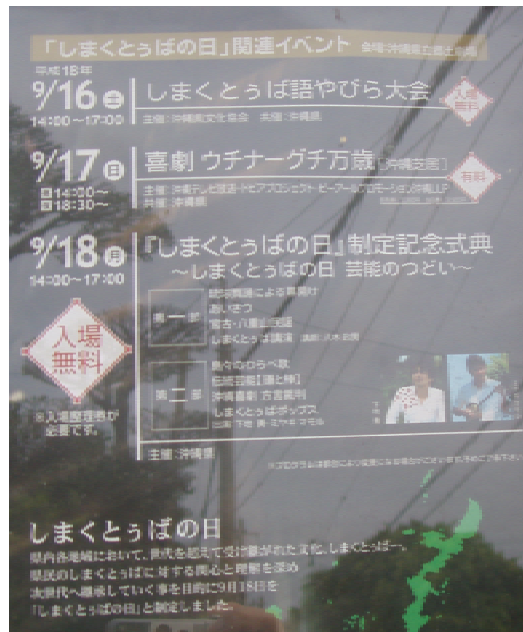


写真4 写真3の右上部分

「県民のしまくとぅばに対する関心と理解を深め次世代へ継承していく事を目的に9月18日を「しまくとぅばの日」と制定しました。」とある。

6. おわりに

方言撲滅・標準語励行という教育は沖縄の人々を日本国民へ同化させる目的で国家や沖縄県によって強制的に行われたと考えられてきた。「天皇の人民が野蛮な言葉(沖縄方言)を話してはいけない」、「標準語を話すことで日本人の誇りを持つ」という指導は中央集権主義の表れであると考えられる。しかし、それだけでは民衆の中にこれほどまで広がらなかったのではないだろうか。沖縄の人々にとって標準語は生活するために不可欠なものである。「本土の大学に入ったときや就職で本土に出たとき、軍隊に入

ったときなどに、本土の人々と話ができるようにするため」という理由で標準語励行を行なう学校もあった。このようなことから、国家や県の一方的な強制だけではなく、人々が標準語の必要性に気づいたことなどの要因も複合して生まれた教育だといえるのではないだろうか。この教育を進めるための道具であった方言札の経験を、話者の方々は現在でも鮮明に記憶しているようだった。標準語励行や方言札の経験はそれほど印象深いものだったと考えられる。

今回の調査から方言撲滅・標準語普及 方言衰退 方言保護という方言の価値の変化を確認することができた。沖縄方言と他の地域の方言の変化は同じであるが、教育への力の入れ方は他の地域よりも沖縄方言の方が強いように感じられる。近代の標準語教育において標準語を強制されたり罰則を与えられたりしたことへの反発が、現在の盛んな方言保護活動を生み出したと考えられる。

謝辞

沖縄でのフィールドワークでは、多くの方々にご協力いただきました。本文中では記号で示しましたが、聞き取り調査の話者としてご協力いただいた以下の皆さんには、心から感謝申し上げます。

稲嶺清子さん、親泊康治さん、久高友仁さん、国吉朝政さん、玉城倭子さん、徳村トヨ子さん、仲本和子さん、仲本将成さん、富名腰久雄さん、富名腰米子さん

また、話者の方々をご紹介くださった那覇市立城西小学校仲地末子校長先生、那覇市立城南小学校東江美根子校長先生、那覇市立泊小学校福地哲功教頭先生、沖縄県立芸術大学仲原穰先生にも、ここに記してお礼申し上げます。

参考文献

- 井谷泰彦(2006)『沖縄の方言札 さまよえる沖縄の言葉をめぐる論考』ポーターインク
- 近藤健一郎(2002)「近代沖縄における方言札(4) 沖縄島南部の学校記念誌を資料として」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』50 愛知県立大学文学部児童教育学科・愛知県立大学文学部
- (2003)「近代沖縄における方言札(5) 沖縄島中部の学校記念誌を資料として」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』51 愛知県立大学文学部児童教育学科・愛知県立大学文学部
- (2004)「近代沖縄における方言札(6) 沖縄島北部の学校記念誌を資料として」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』52 愛知県立大学文学部児童教育学科・愛知県立大学文学部
- 新里恵二(1963)「沖縄における標準語政策の功罪」『言語生活』142 筑摩書房
- 関口千佳(2003)「「沖縄方言論争」にみる柳宗悦の精神」『近畿大学文芸学部論集 文学・芸術・文化』14-2 近畿大学文芸学部
- 外間守善(1968)「沖縄の言語史」『文学』36-1(『日本の言語学 第6巻 方言』大修館書店、1978年、所収)
- (2000)『沖縄の言葉と歴史』中央公論新社
- 屋嘉比収(2003)「方言論争の記憶」『沖縄を深く知る事典』日外アソシエーツ株式会社

資料

- 首里かわらばん編集会議(2006)「首里かわらばん」第5号 (財)海洋博覧会記念公園管理財団・首里城公園管理センター